

2026 年度 夏期インターンシップ実施報告書（概要版）

2026/10/21

公益財団法人日本グローバル・インフラストラクチャー研究財団（日本 GIF）

日本 GIF は、2026 年 8 月から 10 月にかけて、第 6 回夏期インターンシップ「グローバル・インフラストラクチャーに関する調査研究」を開催した。国内 8 大学の学生が参加し、2 つのチームで約 2 か月間にわたり共同研究を進め、9 名がプログラムを修了した。

1. 実施概要

実施期間	2026 年 8 月 1 日（土）～10 月 3 日（土）
対面会場	L stay & grow 南砂町（東京都江東区）
実施形式	対面ミーティング 2 回（延べ 3 日間）、オンラインミーティング各チーム 4 回
参加・指導体制	学生 2 チームに対し、チューターを各 1 名配置
成果	チームごとに論文を作成し、専門家を招いた成果発表会で発表。修了者 9 名

2. 開催目的とプログラムの特徴

本プログラムは、若い世代に国境を越える大規模インフラストラクチャーや、それを取り巻く環境・資源・社会の課題への関心を持ってもらうとともに、調査研究の進め方や学術論文の執筆を実践的に学ぶ機会を提供することを目的としている。

学生は専門分野の異なるメンバーと協働し、研究課題の理解、文献・統計データの収集、分析、論文作成、研究成果の発表までを一連の活動として経験する。チューターは各チームに継続的に伴走し、調査方法や論文執筆を支援する。地域や大学の枠を越えて学生同士が交流できる点も特徴である。活動は講義を受けるだけでなく、自分たちで資料を探し、根拠を確かめ、異なる意見を調整して研究成果を一つにまとめる実践的な構成としている。最後に専門家への発表と質疑応答を設けることで、調査の過程だけでなく、研究内容を他者に分かりやすく伝える力を養うことも重視している。

3. 研究テーマと調査の視点

2026 年度の共通研究テーマは、1980 年に米国政府が公表した『The Global 2000 Report to the President of the U.S.: Entering the 21st Century』（邦題『西暦 2000 年の地球』）が示した将来予測の検証である。学生は、主として西暦 2000 年頃を対象とした予測を、実際のデータや文献と照らし合わせた。

分析では、①当時どのような予測が示されたのか、②予測手法・前提や論理は妥当だったのか、③実際の結果との差はなぜ生じたのか、という 3 つの観点を重視した。単に予測の当否を判定するのではなく、その後の社会経済情勢や技術の変化も検討することとした。

リソース（資源・エネルギー）チームは原子力発電、エネルギー消費、石油需給・資源量等を、ネチャー（自然環境）チームは気候変動、都市人口、水資源需給等を担当した。

4. プログラムの実施経過

(1) 第1回対面ミーティング | 8月1日・2日

第1回対面ミーティングは、8月1日午後と2日午前に開催した。開始時にはプログラムの趣旨と目標を共有し、運営スタッフ、チューター、学生の自己紹介を行った。自己紹介では、ほかの参加者との共通点を見つけて発言する形式を取り入れるなど、初対面の学生が打ち解けやすいよう工夫した。続いて、日本 GIF の活動とグローバル・インフラストラクチャーについて説明したうえで、今年度の研究課題を提示した。また、『The Global 2000 Report』が刊行された時代背景や、当時の地球規模の課題認識について解説し、研究対象となる資料の位置づけを学ぶ時間を設けた。

研究テーマの説明後、抽選によって2チームを編成した。さらに、チューターによる約1時間の「論文の書き方」の講義を実施し、研究目的の設定、根拠に基づく記述、論文構成など、論文執筆に必要となる基本的な考え方を学んだ。

初日の後半には、各チームで約70分のミーティングを実施した。担当する予測の内容を確認するとともに、調査対象の整理、必要となるデータや資料、役割分担、今後の進め方などを話し合った。夕方には懇親会を行い、学生と関係者の交流を深めた。

翌8月2日は、各チームが独立した会議室で約2時間30分のグループワークを行った。チューターの助言を得ながら、研究対象を詳しく検討し、分析方法や資料収集の方針を具体化した。また、オンラインでの共同研究に向けた活動日程と課題を確認し、以後の研究活動につなげた。

(2) オンラインミーティング | 8~9月

第1回対面ミーティング終了後から第2回対面ミーティングまでの間、各チームはチューターの指導のもとで4回ずつオンラインミーティングを開催した。対面で集まる機会を限りながらも、継続的に議論し、研究作業を進める体制をとった。

各回のミーティングでは、学生が分担して調べた内容を報告し、使用する統計や文献の妥当性、予測値と実績値の比較方法、予測と実際の結果が異なった理由について意見を交換した。必要な追加調査や次回までの作業を確認し、個別の調査結果をチーム全体の分析に結び付けた。

研究の後半には、収集した情報や分析結果を整理して論文の執筆を進めるとともに、最終発表用のスライドを作成した。学生同士で成果を持ち寄って検討し、チューターから助言を受けながら内容を改善するという過程を繰り返した。

各自が独立して資料を読み込む時間と、ミーティングで意見を持ち寄る時間を組み合わせたことにより、共同研究で必要となる情報共有や役割分担、議論を通じた論点の整理を経験した。遠隔での活動であっても、研究テーマを継続して追究できるように進捗確認を行った。

(3) 第2回対面ミーティング・成果発表会 | 10月3日

最終日の10月3日には、午前9時30分から午後3時まで、各チームが研究成果の取りまとめと発表準備を行った。論文の内容を確認しながら、スライドの調整、発表の練習、質疑応答の準備を進めた。

午後3時30分から成果発表会を開催し、各チームが約30分間の研究発表を行った。その後、大学教員や研究者等を含む7名の専門家を講評者として迎え、各チーム約30分間の質疑応答を実施した。学生は予測の検証方法や分析結果を説明し、講評者からの質問や意見に回答した。

講評者からの主な指摘

講評では、予測と実績を比較することに加え、「なぜ予測が外れたのか」をさらに掘り下げて説明することの重要性が指摘された。特に、当初のモデルが置いた前提、当時の技術的制約、予測後に起きた政策・経済情勢の変化などを総合的に捉える必要があるとの助言があった。

資源・エネルギー分野については、石油危機、国際政治・経済の変化、原子力発電をめぐる事故や事業計画の見直し、技術革新などが予測に与えた影響が議論された。自然環境分野についても、気候や地形などの自然的要因と、人口・都市化・経済発展などの社会経済的要因を切り離さずに考える視点が示された。

さらに、研究の目的と結論を明確に対応させること、予測の当否だけでなく、予測の違いが社会や政策にとってどのような意味を持つかを考えること、刊行当時の報告書が伝えようとした問題意識にも目を向けることの大切さが指摘された。

成果発表会の終了後は、修了した学生 9 名への修了証の授与と記念撮影を行った。引き続き懇親会を開催し、学生、チューター、講評者が意見を交わしながら、約 2 か月間の活動を締めくくった。

5. 研究成果と参加者の声

各チームは担当分野について調査研究を進め、その成果を論文としてまとめるとともに、成果発表会で説明した。学生にとって、資料の読み込みからデータの比較・分析、共同執筆、専門家との質疑応答までを経験する機会となった。なお、各チームが作成した研究論文は別途取りまとめ、本概要版には収録しない。

プログラム終了後には参加者アンケートを実施した。「切磋琢磨しながら、教え合いながらチームの活動を行うことができた」「多様な観点から物事を考えることができた」「多くの専門家の前で成果発表というものをしたことがなかったので、とても貴重な経験になった」などの趣旨の感想が寄せられ、プログラムは概ね好評であった。「グローバル・インフラへの関心が高まった」という回答も多かった。

専門分野の異なる学生が一つの研究課題を分担し、互いの調査結果を検討しながら論文としてまとめ、さらに専門家からの質問に向き合うまでの一連の経験は、本プログラムの目的に沿うものとなった。研究活動と大学間交流を組み合わせた機会として、今後の学びにつながる経験を提供した。

6. 活動記録写真

以下に活動の様子を示す写真を6枚掲載する。



第1回対面ミーティング



自己紹介



レクチャー



修了証の授与



集合写真



懇親会